

大分県の民俗芸能(三)

染 矢 多 喜 男

10 杖・風流 南海部郡弥生村

植松に鎮座する愛宕神社の8月24日(昔は旧暦7月24日)の祭礼に元田(杖)・尺間(風流)両部落の人々により奉納される。

行事の概要

当日の朝、尺間の天満社に勢揃いする。午前九時に出発して愛宕神社に向う。行列の順序は毛槍組・弓組・額組・旗幟組・鉄砲・玉鼻面・獅子・神主(祢宜)・神輿・神主(宮司)・区長・杖組・頭取・踊組・しずみ組・鼓・鉦・笛・大太鼓・小太鼓である。毛槍は10名で、川中(2名)・黒土(1名)・田平(1名)・岡(1名)・尺間(1名)・長畑(2名)・津留(1名)・備後石原(1名)である。弓は10名で、稽古屋(4名)・小浪(6名)。額は3名で各部落の廻持ちである。額の正面には「愛宕神社」、裏面には「尺間組」と記してある。上部に幣を挿す。旗幟は「愛宕大権現」と記し、岡部落の朝倉家が世襲的に捧持する。鉄砲6挺は切水部落の役である。玉鼻面は1名で各部落の廻持ちである。服装は面・狩衣・脚絆・手甲・白足袋・草鞋で、獅子を描いた鉾(ナガシバタ)を持つ。祢宜と宮司は馬に乗る。頭取は杖と風流の頭取各1名で、袴を着ける。約四軒の行進中は囃組がミチガクを奏する。小浪部落から獅子がミチガクを舞う。国道から神社への道に入るイリコミで、ミチガクを舞いながら3回廻る。さらに支所前で3回舞う。太鼓の「イーヤ」で杖がニワイリの前半を使う。マクリ太鼓で石段を上って社前に入る。獅子・杖・踊は四列縦隊に整列し、その後にしずみ・鼓・鉦・笛・太鼓が横隊を作る。小休止をする

拍子木の合図で集合し、芸能が始まる。笛の一節が終れば、ヒヨウシがミチガクを奏し、獅子が舞う。拍子木が入る（以下拍子木で区切りを打つ）。笛が一節吹く。大・小太鼓の「イーヤ」の掛声で杖がニワイリの前半を使う。杖が始まると獅子は退場する。ニワイリにはイイタテがある。コエのヨリとチリのヨリの両杖が出て、「東西」と声をかける。コエとチリの両杖が「かように候者は当初の杖使いにて候。今日の御神事に神の御杖を使い候。忝くも此の杖と申すは天竺三の河より相伝下に付き、上下を使うなり。また房付け候ことも子細の候。重ねていわれを申そう」とイイタテをする。杖は終ると中央に集まって、杖を立てて座る。しずみが出てしずみ（一番）を歌う。終れば音頭が「千早振る」を歌い、童子が踊って退場する。大太鼓が「はーいや、どうでもこうでも遠く廻らにゃ、清水のいや、花の都を見下せば、やー」と囃す。ヒシギの笛で杖が出る。笛がサガリハを奏し始めると杖を使う。以下順序の概略を記すと、杖（ニワイリの後半とゴホウの前半）―しずみ（5番）―音頭（山崎）・踊―杖（ゴホウの後半とカタカケの前半）―しずみ（8番）―音頭（山川）・踊―杖（カタカケの後半とタキアイの前半）―しずみ（3番）―音頭（小田巻）・踊―杖（タキアイの後半とアゲの前半）―しずみ（4番）―音頭（天照大神）・踊―杖（アゲの後半）を使う。獅子がミチガクを舞って、芸能の奉納を終る。整列してミチガクを奏しながら退場する。小浪部落のカサの所で解散する。

演 技 者 と 装 束

杖（20名） カブト（馬毛製。シャグマのこと）・白鉢巻・上着（背に各家の定紋と袖口に長三角形の模様）・胸板（定紋を染め出す）・カリサン（赤）・襷（水・赤・白の布をなう）・上締め（水色の布を左で結び、なって右に挿む）・手甲（紺地に白の線と玉）・脚絆（紺地に白の線と玉）・白足袋・ゴズ草鞋。杖は6尺2寸で、両端に紅白の紙房をつける。

音頭（15名） 袴・白足袋・草履

しずみ（2名） 音頭に全し。

踊(15名) 烏帽子・白衣・白足袋・草履。採物は踊によって扇や幣(白と色物)を持つ。

太鼓(大・小各5名) 杖に全じ。

笛(5名)・鼓(5名)・鉦(5名) 音頭に全じ。

獅子(15名) 頭は三つ。一頭に2名。股引・黒足袋・草鞋。鼻取は面・狩衣・股引・黒足袋・草鞋。一米幅の大団扇を持つ。周囲に色房をつけ、日・月・兔を描いてある。

沿革 など

杖組の頭取は元田部落の荒川家(当主は主税)が世襲している。同家は「荒川流杖口事相伝覚」・「飛尾山愛宕大権現毎歳七月廿四日祭礼式棒伝授目録」・「覚」(杖を退いた者の名簿)・「杖續切後松覽帳」などの文書を伝えている。「荒川流杖口事相伝覚」(正徳元年7月21日の日付あり)によれば、市野瀬新兵衛(荒川氏は市野瀬を称していたが、明治8年に荒川流の家元であるというので荒川と改姓した)が五十川与市右衛門より伝授されたという。愛宕神社が勧請された慶長元年以来奉納されていると伝えるが、正徳元年が確認される最古のものである。「靈峰釈魔」によれば、宝暦3年大公儀の忌中仰出され、一切の神賑等差留めとなり中絶していたが、「年々杖踊組相滞神前不埒故、諸作実のり悪敷前畑等に至迄猪鹿諸作毛を荒し、且前畑等一個所実のり見事に出来候処取揚候へば、不残本実無之彼此不審により云々」で、明和2年に杖踊りは復活を許されたという。「棒伝授目録」の最古の年号は明和4年であるから、この復活の際に何らかの申合せがあったのかも知れない。大正年間にも衰退の危機が訪れたようで、大正12年に杖踊りを維持するために神杖頼母子講が結成され、百円を基金として集めている。この大戦後は他地方へ出稼ぎに出るものが多くなり、漸くその維持に困難をましている。

希望者(長男)が15才くらいで杖仲間に入る。まずタタキアイから始め、カタカケ・ゴホウ・アゲを経て、ニワイリを習得する。ニワイリのヒキマワシをし、新入りがあって人数に余裕ができれば退く。40才前後になる。昔は隠居祝いといってお茶を

入っていた。7月11日から杖ナラシ（練習）をする。頭取の家に集合してタテオミキを神に供える。ナラシは昔は頭取の家でしていたが、現在は公民館でしている。白鉢巻・縄襷・素足です。18日の夜に役割を決めてタテオミキを供える。21日には尺間の風流組と合同して、昼間の天満社に集合し、オオナラシをする。ウチクミという。22日は頭取の家でフサキリをし、タテオミキを供える。24日の出発前と終了後にもタテオミキを供える。11日から祭礼の終るまで、不浄を避け女性に接しない。衣裳類も女性にさわらせず、各自で洗濯や修繕もした。風流組にも総頭取があるが世襲ではない。総頭取が伝える巻物は白杵市東神野の風流に関するものではないかと思う。もしそうであるならば、天保12年に東神野から伝わったということになる。しかし、東神野の風流とは大きな相違がある。第一に踊りが根本的に違い、東神野には童子踊りはない。第二に音頭の歌詞は一、二の例外を除けば共通なものがないという点である。以上の二点から、東神野の風流とは別のものであるが、その起源を明らかにすることはできない。

風 流（歌詞）

し ず み

- 一番 此処は伊勢住吉の御前で御座る。いざや人々の宮廻りを始めて、神をもすずしめのみをまいらしよなりと。
- 二番 鳥が鳴けば靱落しゃる。月夜の夜鳥はいつも鳴く。
- 三番 十七・八は木綿袴。身は単衣にしてときゃいとし。
- 四番 尾の松風にたえふして、風も細まる寅の刻、神の告げをも待ちている。
- 五番 あの見ええこの山みさえ。頂やつゆはをはらぎの。
- 六番 聞きしにまさる名所かな。聞きしにまさる名所かな。
- 七番 神の告げをも待ちている。神の告げをも待ちている。

八番 都に近き宇治川の布晒すこそ面白や。布晒すこそ面白や
九番 吉野の桜高雄の紅葉、田子の浦にして汐ぞ満ちる。

千 早 振

一番 千早振る千早振る、熊野詣りを急がれて音無川原へはや着きにける。えだやをうやまうを、えだや清めのえだや清めの。
二番 愛宕山愛宕山、参り下向の日出度さに、みかえしずかえ守り給えや。えだやうやまうをえだや清めのえだや清めの嬉し
三番 やの嬉しやの、身をも清めて参ろやの。みすのお山を巡り給えや、えだやをやまうをえだや清めの。
四番 とびきとるとびきとる、思いのたかをあをとしておもて返すは身に添えつる。えだやをうやまうを、えだや清めのえだや清めの。

五番 これもとのこれもとの、ぬがずかたきをゆるぎでてさいきをおじをまもらぬ。えだやをうやまうをえだや清めのえだや清めの。

山 は 崎

一番 山は崎に隠れなし、ハイヤハ、深き心、愛宕山、ヤーエダヤ、愛宕に参るべし。
二番 あまり心の苦しさに、ハイヤハ、これなくちきに腰を掛け、ヤーエダヤ、こしんを守るべし。
三番 山は崎に隠れなし、ハイヤハ、さても鞍馬や比叡山、これの光りかまざるべし。

緒 環

一番 中にもこの敷島は敷島は、人敬いて神力まさるべし。

二番 緒環に針をつけ、裳裾にこれをとじつけ慕い行く。

三番 先是岩戸のその初めその初め、隠れし神をえざされ八百万。

山川

一番 山川の山川(かで)の風(しからめ)の掛けたるしがらみはヤー、流れもやらぬ紅葉なりける(ナシ)。紅葉なりける

二番 鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにけり(ト)。夜ぞ更けにけり。

三番 もとよりももとよりも日の本なれば照りもせねヤー、さりとてもまた雨かした川(あ)。雨かした川。

四番 秋鹿が秋鹿が身をば深野に隠せどもヤー、恋には声を惜しまざりけり(たに)。惜しまざりけり。

五番 ほのぼのとほのぼのと明石が浦の朝霧にヤー、島隠れ行く舟ぞ押し進む(ど)。押し進む。

天照大神(正)

一番 天照大神その時はソレ、岩戸を開き給うなり。

二番 先(わ)ずは常闇雲晴れてソレ、日月光輝けば。

三番 人の面は白々とソレ、見える面は面白や。

正屋小屋

フタフシ
一番 しうやごややかとソレ、思えどもハーヨイハーヨイヨイハーイヤハ、朝の別れんでやヤー、かねて思(おんぼ)えば。

二番 短か夜やかとソレ、思えどもハーヨイハーヨイヨイハーイヤハ、語る間もなん語る間もなんヤかねて思(おんぼ)えば。

三番 日も暮れ主はソレ、思えどもハーイヤハ、あじきしきなんヤかねて思(おんぼ)えば。

日は照れの

一番 日は照れの日は照れの、のばの下のこかれ行く、山田に落ちる滝々の水。

二番 鳴神が鳴神が、雲の絶間に落ちしやりて落ちしやりてヤー、望む所へ雨が降りぬる雨が降りぬる。

三番 筑波嶺の筑波嶺の、峰より落つるみなな川、雨ぞ積りて測となりぬる測となりぬる。

四番 うずらなくうずらなく、三笠の山の夕時雨、漏れて後は清くなるもの清くなるもの。

五番 雨降りて雨降りて、上下萬霊目出度さに、皆上々もゆわどのすへゆわどのすへ。

春は桜

フタフシ
一番 春は桜のヤーその下でん、桜重ねのまる遊び。おいてはおつねそろ。丸の踊りは面白や。

二番 夏は柳のヤーその下でん、柳重ねのまる遊び。おいてはおつねそろ。丸の踊りは面白や。

三番 秋は紅葉のヤーその下でん、紅葉重ねのまる遊び。おいてはおつねそろ。丸の踊りは面白や。

四番 冬は葎のヤーエの下でん、葎重ねのまる遊び。おいてはおつねそろ。丸の踊りは面白や。

汐汲み

フタフシ
一番 舟は出て行く後見ればハイイヤハ、恋のはなら散りかかる。汐汲みていざやおやまうをは清め(だ)の。

二番 思ひよれたかわれほとこハイイヤハ、松に小藤のよれたよに。汐汲みていざやおやまうをは清め(だ)の。

三番 君のめもとかけやみがさハイイヤハ、何時もほつれてしおらしや。汐汲みていざやおやまうをは清め(だ)の。

四番 人がたもれはかためとのハイイヤハ、我は処女の妻さだめ。汐汲みていざやおやまうをは清め(だ)の。

五番 我は野の花醜の花ハイイヤハ、うらば床とれ折らぬ間に。汐汲みていざやおやまうをは清め(だ)の。

伊津々

フタフシ
一番 その頃はヤ、紀有恒娘とて、よもせず心浅からざりし浅からざりし。

二番 たつつやまヤ、夜は夜に君が一人行く、覚束なきも夜の道ぞな。

三番 更け行くやヤ、在原寺の夜の月も、昔もかわらぬ衣なりける衣なりける。

四番 朝なりとやヤ、浪こそたけき桜花、お日に照らすなお日に照らすな。

五番 つついつにつにかけいまるがたき、年に稀なる人ぞ待ち居る。

花見

フタフシ
一番 春は花見に里行かいヤ、霞に柳引く春の日は四季の踊りを踊らぬ。

二番 夏は涼しき白川のヤ、水冷やかになりまさる四季の踊りを踊らぬ。

三番 秋は更けゆく空見ればヤ、龍田の紅葉秋の鹿四季の踊りを踊らぬ。

四番 冬は雪見に人やあるヤ、霰に暮れる冬の日は四季の踊りを踊らぬ。

東西南北

フタフシ
一番 東は東は関東奥までもヤ、老若男女人までもヤ、参り下向の目出度さに。

二番 西は西は住吉住吉天王寺、筑紫の国の人までも、参り下向の目出度さに。

三番 南は南は紀州熊野山、幾末末の人までも、参り下向の目出度さに。

四番 北は北は越前能登や加賀、越後信濃の人までも、参り下向の目出度さに。

色 五 色

- フタフシ
一番 赤きもの赤に赤土茜染め、朱の酒盃に海老の彫物。
二番 きんなものきんなくちなしこきん染め、黄金しよどく山吹の花いざや五色よすすめの。
三番 青きものあおに青柳青柳、谷のお笹嶺の若松。
四番 白きもの白に白土白鷺の、越後のおざき岳々の雪。
五番 黒きもの黒き黒土黒烏、春の焼野に熊がすすらぬ。

塩 飽 舟

- ヒトフシ
一番 塩飽舟かの君待つらソレ、風を静めて名告り合う。
二番 酒屋酒屋がなな酒屋ソレ、なかの酒屋がじろ恋し。
三番 我は酒屋のさかばやしソレ、昼は暇なか夜御座れ。
四番 おじゃるおじゃると名は高きソレ、浜の松風音ばかり。
五番 沖の鷗に物問えばソレ、我は立つ鳥波に問え。

鳴 子

- フタフシ
一番 これな扇子へ花が散る。いざや若い衆鳴子をかきよや。鳴子をかきよや。鳴子の踊りは一踊り。
二番 鳴子の板には何をしょか。いざやそなたの御蔵のいたがねを。いたがねを。鳴子の踊りは一踊り。
三番 鳴子の管には何をしょか。いざやそなたの御裏の七竹の小竹を。いざや鳴子の踊りは一踊り。

四番 鳴子の綱には何をしょか。^(えだ)いざやから紅の丸のうちを。丸のうちを。鳴子誰にひかしか。鳴子の踊りは一踊り。
 五番 そなたのしそくの花わかにか。鳴子はひかいでしよるをひく。鳴子の踊りは一踊り。

高砂

^(木)旅衣今は遙々都路にさもおもいし播磨がだ高砂の浦に着きにけり。

しづめ 月住吉の神遊びよ。

あいのうた 高砂踊りは一踊り。

一番 高砂の尾の上の鐘の鐘の音は諸行無常をぜ方め方生滅寂滅ゆらくと響くもの。

二番 高砂や尾の上の松も年経れて老の波にも寄り来るや。

三番 高砂の此の浦舟に帆を揚げて月諸共に出で潮の。

四番 まさきくのかずらは長き世のたとえざりける常盤木や。

五番 四海波国も治まる時津風枝も鳴らさぬ御代なりや。

引は みかげをむかう行難やげにさまたまの参りにてこれもすみなる住江^(上)せかいはとはこれあらじ。

11 杖・風流 大野郡野津町西神野

熊野神社の旧7月7日の祭礼の奉納行事である。

演技者と装束

太鼓 太太鼓3名・小太鼓3名、大太鼓はガッソウ・単衣(柄物で尻をからげる)・色袴(三方掛けにして背に長く垂らす)・

テヌキ・脚絆(する人もある)・白足袋・紙緒草履。五色房の付いた撥。小太鼓はガッソウのかわりに色鉢巻をする外は大太鼓に同じ。

笛 (6名)

鉦 (6名)

鼓 (6名)

白衣・白袴・白足袋・紙緒草履。

唄い手(数十名) 同右。

杖(8名) ガッソウ・鉢巻・上衣(紺地に白の梅鉢紋)・胸板(紺地に白の梅鉢紋)・響(紅白)・上締め(白布を左で結びなす)・右にさす)・股引(紺)・脚絆(紺に白の水玉文)・黒足袋・草鞋、杖は6尺で両端に五色の紙房をつける。

行事の概要

午後2時頃、神職(広田家。モトミヤと通称される)の所に集まる。神職から不浄払いをしてもらう。責任者の合図(拍子木)で最敬礼。杖は上・下を使い、風流は上・中・下の各部落が1番ずつ唄う。神職・総代・太鼓(囃と唄い手)・花棒・参列者の順に、行列を作って約三百米離れた神社に向う。途中はミチガクを奏する。一の鳥居で杖はデハを使う。ミチガクを奏しながら社前に行く。右手に杖が1列横隊にならび、左手には太鼓が前列、囃(唄い手を含む)が後列にならぶ。中部落の神楽組が神楽を3番舞ってから杖と風流をする。オコシ・ミツメ・ゴホウ・ゴリン・タタカイ・カタカケ・ニワイリを使う。風流は上・中・下の各部落が1番ずつ唄うが、1番は15分ぐらいかかるので、その番の1と5とを唄い他は略する。杖・風流が終るとオサメの神楽を奏納する。

杖は番の名称やイイタテの文句から弥生村元田部落に伝わる荒川流の杖であることは確認されたが、どのようにして西神野に伝わったか不明であった。幸にも野津町垣河内の板井畑部落が「神伝荒川流杖之事」という巻物を所蔵しておる。この巻物によってその経過が判明した。元禄12年に川野与八ら3名が一ノ瀬弥次兵衛から伝授されたものを、安政6年からそう遠くない時期に西神野へ伝えたものである。風流は野宮・五色・恋名・時雨・連雀・お伊勢・晒・天神・飛驒・小町・八幡・真言・念伝・供養・高砂・山伏の15番がある。風流についても板井畑部落が「伊熊流風流伝」を所蔵しているが、西神野の風流は板井畑のを伝えたという積極的な証拠はない。むしろ、臼杵市東神野の風流を伝えたということの可能性が強い。前記15番の中、高砂・山伏を除く13番が共通であり、東神野よりとらえて伝わっているようである。高砂は弥生村尺間にあり、山伏だけは東神野・尺間の何れにもない。

旧6月20日の祭に、総代と杖および風流のヒキマワシ(責任者)が7月7日の奉納行事の打合せをする。この時に各部落がその年に唄う風流の番をきめる。21日の夜から上・中・下の部落毎に各戸廻持ちで練習をする。7月6日に太鼓と杖の合同練習をして合せる。ウチクミという。元来、上部落が杖、下部落が風流をしていたが、8年前から両方できるようになり、杖の人数も16名にした。唄い手は60戸の中、囃と杖に出ない家の者がなる。すなわち、各戸から1名は必ず出場する。

習得は太鼓から始める。小学校に入れば太鼓を習う。青年(15才)になると唄い手や杖になる。笛・鉦・鼓は年令に関係なく、太鼓が終れば好みに応じてなる。上部落では長男は太鼓、オジ(2・3男)は杖を習得するならわしという。

風流(歌詞)

野々宮

おつ 千早振る千早振る、此処は高天の原なれば原なれば、集り給え四方の神ヤー。八百万の神達諸共に天の岩戸に参らんと

大神宮は籠らせし、神社の神もともなつしきせいはいしんごん神神楽。ごしんあればこそこの世を照らせ給うなり。老若男女諸共に貴方に参り致さんと貴方に歩みを運ばん。

しづめ 我に歩みを運ぶものなり。

あいのうた 蓮華を神代と念ずればしんの心は観世音菩薩。

一番 あれに見えしは岩戸山岩戸山、老若男女諸共に貴方に参り致さんと貴方に参り致さんと。

二番 大神宮お宮にじんじやごうじんじや、ごうごんじやの神も諸共に貴方に参りを致さんと貴方に参りを致さんと。

三番 関東駿河有難や有難や、小野の小町の歌につきうらべのみことの現われし。

四番 野々宮踊りに御神楽御神楽、天照る神とぞ現われし現われし、天照る神とぞ現われし。

五番 忘るなよこの御恩神に神楽のごしんのう神に神楽のごしんのう。

ひき 天の天の岩戸をあとに見て天の岩戸を後に見て、伊勢路伊勢路高天原をついてがし給うなり。

五色

おつ 色々の色々の品こそ変れ、五色には五色にはいざいざ踊り始めん。この踊り始めん。

しづめ 花は散りても惜しまざるもの。

あいのうた いざや五色を踊るよ。

一番 黒きもの黒きもの黒根黒土黒鳥、春の焼野に熊や臥すらん。熊や臥すらん。

二番 青きもの青きものときさかりきに糸柳、谷の根笹に峰の若松。峰の若松。

三番 きんなものきんなものひわだくちなしこきんぞめ、きがねしようぞく山吹の葉。山吹の葉。

四番 赤きもの赤きもの茜赤土赤しやぐま、朱の盃海老の盛りもの。海老の盛りもの。

五番 白きもの白根白土白鳥、越後兎にたけざきの雪。

ひき 雪を雪を眺めて雪を眺めて山廻る。

恋 な

おつ よいよいによいよいに、脱いては脱かるかりころもかりころも、掛けては頼む同じ世に、てんや住む甲斐あらばこそ、忘れ形見もよしなしと、捨てては置かれぬとおれば、面影にたち勝りし起き臥し、我が手枕より後より、恋の責めくれば、はんふせんかたなみのま、沖走る舟ぞおんもしろ。

しづめ 恋な恋恋風が来ては袂にかいもつれ袖のおんもさよ。

あいのうた 恨みてぞやるたまずさのはらはらほろほろはらというらん。

一番 我が恋は我が恋は寺にこそあれ硯箱こなかのかけごの筆ぞ知り候筆ぞ知り候。

二番 我が恋は我が恋は潮干に見ゆる沖のつし見えつ隠れつ乾く間もなし乾く間もなし。

三番 我が恋は我が恋は細谷川の丸木橋踏み落されて濡るる袖かな濡るる袖かな。

四番 我が恋は我が恋はこいしおつぼの溜り水誰搔き分けてやる方もなしやる方もなし。

五番 忘るなよ我も忘れず諸共にたとえいづくの里に住むとも。

ひき 恋恋恋がられて庭巻き藁にねするまいぞねまいぞざっと掃いた畳の上に。

時 雨

おつ 天曇り天曇り、俄に雲のさそえ来てさそえ来て、早や早や雨になり候夕立雨になり候。
しづめ 雨降り真の闇になり候。

あいのうた 立寄れわかし傘召せわかし、夕立雨の今降るに。

一番 日は照りて日は照りて、のおぼのしたもこがれ行く。山田に落ちよ岳々の水岳々の水。

二番 鳴神が鳴神が、雲の絶え間に落されて、望む所に雨ぞ降り候雨ぞ降り候。

三番 筑波嶺の筑波嶺の、嶺より落つるみな川の。雨ぞ積りて測となるらん。

四番 鶉鳴く鶉鳴く、深草山の夕時雨。濡れて後には清くなるもの清くなるもの。

五番 雨降りてしょうげばんげも目出度かる。また上々も喜びぞする喜びぞする。

ひき 向いの山から時雨がして来て皆女郎達を濡らした。

連雀

おつ 色々に、品こそ変れ連雀は連雀は、三条近江下おさかんや。中将姫のころばたは小夜の中山月ぞさす。各々ふたつておりがたや。

しずめ 綾の下地に般若もぢ候。

あいのうた 買うや品物鉢や毛抜きびんだい鏡。

一番 国々に国々に、諸行無常の音がする錦の曼茶羅織りて渡さん織りて渡さん。

三番 江島には江島には、十五夜月が出づるけい朝日に向う蓮の花かな蓮の花かな。

四番 あれを見よあれを見よ、越後町ではもみを売る我も値をしようかづきをとらんかづきをとらん。

五番 日向のや岩戸たとわば月の山池さし下すしまお舟かなしまお舟かな。

ひき 日向に霞のかかりし時は般若のもじにて唱うべし。

お伊勢踊り

おつ おいせのやおいせのや、葉の名をも菊の酒菊の酒。

いざいざ踊り始めん。この踊りいざや始めん。

しずめ 伊勢住吉の神遊び。

あいのうた 参り参りて清水に高尾の紅葉吉野の桜丹後のうらばに潮がこもるる。

一番 東は関東奥までも奥までも、老若男女諸共に参り下向の目出度さや。

二番 南は紀州三熊野の里末々の人までも参り下向の目出度さや。

三番 西は住吉天王寺四国筑紫の人までも参り下向の目出度さや。

四番 北は越前能登や加賀越後信濃の人までも参り下向の目出度さや。

五番 高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどは賑いぞする。

ひき とてもとても籠らば清水にとても籠らば清水に花の花の都を花の都を見下して。

晒

おつ 何も見ず何も見ず、月こそ出づれ朝日山朝日山。山吹のせに影見えて月さし下す島小舟。山も川もおぼろおぼろとして

是非も分けぬ景色かな。げにや名にし負う都に近き宇治の里布晒すこそおんもしよ。

しずめ かちんまいだれ四つ折櫓あてて晒さいないただく水はゆらゆらとこんもるる。

あいのうた 晒し晒す宇治の川瀬で布晒す。

一番 夜も明けて夜も明けて、賤がたふさを押し開けて川辺に出でて布を晒さん。布を晒さん。

- 二番 皆人は皆人は、宇治の川瀬で布晒す。何れも同じ袖を濡らして袖を濡らして。
三番 何時とても何時とても、わが身は宇治の橋柱見えつ隠れつ乾く間もなし。
四番 まきの島まきの島、まきの島にて布晒す。我も君故布晒す。
五番 橋の小島が崎に打つ波で宇治のけいせい布晒す。
ひき 淀の川の川瀬の水車、誰を待つやら誰を待つやらくるくると。

天神踊り（花踊り）

- おつ 浪速津の浪速津の、咲くやこの花冬籠り冬籠り今をはるめと匂い来る。今をはるめと匂い来る。
しずめ 花を見て望まぬ花はなけれども主ある花は折るが大事よ。
あいのうた いざさら参ろうお天神花を捧げて参ろうよ。
一番 梅は飛ぶ飛ぶ桜は枯れる世の中に何とて松はつらきものかなつらきものかな。
二番 花盛り花盛り、花は色々多けれど吉野の桜野田の藤かな野田の藤かな。
三番 花盛り花盛り、花はさまざま多けれど牡丹芍薬百合の花かな百合の花かな。
四番 菊の花菊の花、野菊白菊数多咲く色々咲くは八重菊の花八重菊の花。
五番 桜木の下陰は寒からず空にしられぬ雪ぞ降り候。
ひき 黒木の鳥居に鵲が止まって一つの鵲は何をかずきおどってひとぎたまぎて旅人は箸と箸を揃えて。

飛 弾

おつ タベのタベの、仮枕仮枕、宿は数多に変われども同じゆくべの尾張三河の国に着きにけり。

しずめ 萩も薄も立たばとてとても日向が見ゆるでもなし。

あいのうた 飛驒の踊りを一踊り一踊り。

一番 日向の港は七港入舟出舟数知れず数知れず。

二番 飛驒の横田の若苗をしょんぼりしょんぼりと植えたもの植えたもの。

三番 柳の下で水汲めば洒落れた若衆が袖を引く。

四番 釣瓶は九つ身は一つ汲まずとたまれこの清水この清水。

五番 汲んだる清水で影見れば我が身ながらも良い女房良い女房。

ひき 飛驒の匠が掛けし橋はな落せば落つる浮世の習い、余りつれないふりをめす嫌とは思えどまたよはおもいきりしがいつわりとなるあただ何となろうかな。

小 町

おつ 七夕の七夕の、織る人達の手向草手向草、幾年経てか帰ろうの小野の小町が百年に目もあてられぬ景色よ。

しずめ せんつばき枝は熊野に葉は伊勢に花は駿河の小野の小町よ。

あいのうた 小町踊りを一踊り一踊り。

一番 さのめひとにはつらかれそつらかれそ、小野の小町を見るにつけての見るにつけての。

二番 我は酒屋の一つ桶一つ桶、昼は暇ないよさ御座れ。

三番 我はうで候かわうで候かわうで候、あいこならいでめにもつかずめにもつかず。

四番 堺北方町に、札が立つとの札が立つとの、他人の嫁御をとりやとらすなとりやとらすな。

五番 堺過ぐれば住吉の、松にそいして緑恋しの緑恋しの。

ひき ちんのうじしきふせごの煙、後に心がひきさかれて面影に立つ、その面影は現か夢か、ああらしょうだいなしやの人の心はうかうかと。

高砂

おつ 旅衣旅衣、末遙々の都路にさしも思えし播磨が高砂の浦に着きにけり。

しづめ 月住吉の神遊び。

あいのうた 高砂踊りを人が踊り人が踊り。

一番 高砂の高砂の、尾の上の鐘の鐘の音諸行無常せしよめつぼうしよ滅寂滅いらくと響くなる。

二番 高砂の高砂の尾の上の松も年ふりておおいの波も寄り来るや寄り来るや。

三番 高砂の此の浦舟に帆を揚げて月諸共に出で潮の出で潮の。

四番 まさきよかずらは長き世にたとえざりける常盤木の常盤木の。

五番 四海波国も治まる時津風枝を鳴らさん御代やなれ。

ひき 御影を拝むあらたさや、げにさまざまの参りしに、これもすむなる住江に松影も映すなり、せいがいはっとはこれやらん。

八幡

おつ 松高き松高き、枝も連なる鳩の峰鳩の峰、曇らん御代は久方の、月の桂も男山、けいやさやけひ陰に来て、君ばんぜいと祈るなり、神に歩みを運ぶなり神に歩みを運ぶなり。

しづめ ふしみなれどもめられざるもの。

あいのうた 八幡様には月参り後夜の鐘鳴るとのいざさら参ろう八幡。

一番 あれに見えしは八幡山八幡山、八幡様には月参り八幡様には月参り。

二番 なぜしおはらは色黒や色黒や、笠をきしよやれ日笠をの。笠を着しよやれ日笠をの。

三番 門に立ちたは誰が子息誰が子息、おぼろ月夜で見も分けぬ見も分けぬ。おぼろ月夜で見も分けぬ。

四番 舟の上でも女郎はめす女郎はめす、苦をしきねにかじ枕かじ枕。苦をしきねにかじまくら。

五番 舟は出て行く後見れば恋の花やら散りかかる散りかかる。恋の花やら散りかかる。

ひき とてもとても籠らば清水に、とても籠らば清水に、花の花の都を見下して。

山 伏

おつ 山寺の山寺の、一人武者の行くとは行くとは、いざいざ供が要り候。いざや供が要り候。
しずめ ときん鈴懸法羅の貝。

あいのうた ひめぐ踊りを踊るよ。

一番 山伏の山伏の、腰に付けたる法羅の貝おときのべて吹いて慰む吹いて慰む。

二番 君が代は君が代は、千代に八千代にさざれ石巖となりて苔の蒸すまで苔の蒸すまで。

三番 恋すちよお恋すちよお。我が名は未だし立ちにけり。たとえざりける常盤木の常盤木の。

四番 姫御達心やるとも目はやるな目元に恋があらわれぞする。

五番 姫君は後の踊りに立ち出でて踊り見物なされよとするなされよとする。

ひき 姫御姫御踊りはあい済んで姫御踊りはあい済んで、紀州紀州熊野に熊野に帰えらるる。

真言

おつ 月日もうけや行末の神に祈りのかないなば頼みをかけてみしめなば、長くやよも祈らばし長くやよも祈らばし長く。
しづめ この里は真言たもつ里なれば祈る祈りの叶うなるもの。

あいのうた 御幣柳を奉る今は神代や有難や有難や。

一番 ぼぢゃはらかりてきたらんにや祈る祈りの叶うなるもの。

二番 わが前のわが前の、かきの元まで焼け来たを般若のぼうにて打てば火止る。

三番 谷は八つ谷は八つ、峠は九つ身は一つわが行く里はあらざりきの里。

四番 須磨の浦須磨の浦、踊りあかすぞ須磨の浦明石が浦に乗りて渡らん。

五番 なんと国こたん長者の居ると聞く早や早や急げしよみん里かな。

ひき とてもとても、召すならこのうねにこのうねに、しうやしうやせつめをしうやせつめを引き連れて。

念仏

おつ 弥陀頼む弥陀頼む、人は雨夜の月なれば月なれば、空は暗れねども西へ行く弥陀の浄土に渡るよ。
しづめ 仏待つ夜のせつがんじ。

あいのうた 南無阿弥陀仏南無阿弥陀の教の南無阿弥陀。

一番 世界をば世界をば、只仮初めに立ち出でて帰らぬ野辺の露の下草露の下草。

二番 世の中に世の中に、さらに定めはなけれども親をばとわで子をぞといける子をぞといける。

三番 仮の宿仮の宿、仮の宿とは知りながら万の悪をたくわいぞする。

四番 谷川に谷川に、落ちて流れて泥川の身を捨ててこそ浮ぶ瀬もある浮ぶ瀬もある。

五番 このうちは浮世が世界に宿借りて弥陀の浄土に渡りこそする。

ひき 何を何を歎くか皆人は何を歎くか皆人は、ごしよのごしよのいりわをごしよのいりわを歎き候。

12 風 流 (歌詞) 臼杵市東神野

念 仏

おつ 弥陀頼む人は雨夜の月なれば雲晴れねども西へ行く。
しずめ 仏参りはせいぐわいぞ。(がんじよ)

あいのうた 南無阿弥陀南無阿陀弥陀の教の南無阿弥陀。

一番 世界をば(や)只かりそめに立ち出でて帰らぬ野辺の下草。

二番 仮の宿假の宿と(は)知りながら万の悪をたくわえぞす(る)。
三番 世の中にさらに定めはなけれども親をばとわで子をぞといける。(ナン)(すに)

四番 谷川の落ちて流るるのろ川に身を捨ててこそ浮ぶ瀬もある。(うち)

五番 この故浮世の世界に宿(と)りて弥陀の浄土に渡りこそする。(する)
引は 何をなげくか皆人は後生の入り場をなげき候。

真 言

おつ 月日をうけよ行末(神に祈りの)の祈禱にかないなば、頼みを掛けて(み)にしめなば、長くはよも祈らまじ。(もや)(ばし)

しずめ この里へ真言たもつ里なれば祈禱はかのうなるもの、
(は) (祈る祈り)

あいのうた 法華經の文字を新たに読み覚えぼじゃ早かりとるとらん。
(れ) (さ)

一番 御幣に袖を奉る末は神代や有難や。
(で)

二番 わが前はかきの元まで焼けて来て般若の文字で火止る。

三番 谷は八つ峠は九つ戸は七つ我が行先はあららぎの里。
(にて立)

四番 ほのぼのと踊りあかすと須磨の清明石が浦をも乗りて(通らん)。
(そ)

五番 なよなたこくこたん長者の居ると聞くいそげそみん里をも。

引は ととても召すならこの舟に十りをせつめを引き連れて。
(じよらせつに)

小 町

おつ 織姫の織る人達の手向草何年経てか帰ろうに、小野の小町がももとして目もあてられぬけしきかな。
(七夕) (幾)

しずめ (枝は熊野に葉は伊勢に) 花は駿河の小野の小町に。
(よ)

あいのうた 小町踊りをひと踊り。

一番 塚きたがちょうな札が立つたとの人の嫁御をとるなとらすな。
(ナシ) (にや)

二番 我はうでそうろかわうでそろあいこのうではえにやつかぬ。

三番 我は酒屋の酒ばやし中を言われて門に立たとの。

四番 さかいすぐれば住吉の松によそえて縁恋しな。
(ナシ) (おそれて) (の)

五番 あじきやりたやこの文を森の下なる殿様に。

引は (あじきやりたやこの文を、森の下なる殿様に、りんのうちしきふせこの煙、後に心が引かされて、)
(やししょうたいなしやの)
 か)、あらしよのだいらしやなあ、人の心はうかうかと。
(その面影は現か夢)

ひん
 飛 驒 だ

おつ ゆうべゆうべの仮枕、宿は数多に変われども、同じじゆくべの美濃尾張、三河の国に着ぎにける。
(ゆうべ)

しづめ 萩も薄も立たば立てとても日向のみゆるではなし。
(が)

あいのうた 飛驒の横田の若苗をしょんぼりしょんぼりと植えたもの。

一番 日向の港は七港出舟入舟数知れぬ。

二番 (釣瓶は九つ身は一つ汲まずとたまれこの清水)。

三番 我は酒屋の一つ桶屋は暇なしゆうさござれ。

四番 殿に逢おうどて水汲みは水は七桶まだ逢わぬ。
(に)

五番 汲みたる清水で影見ればわが身ながらも良い女房。

引は 飛驒の大工の掛けし橋は落せば落つる浮世の習いあたらつれないふりをめす。
(あまり)

(お伊勢)
 老 せ

おつ (おいせの)
 老せぬや葉の名をも菊の酒、いざいざ踊り始めんこの踊り、いざや始めん。

しづめ 伊勢住吉の神なりぞよ。

あいのうた 参り参りて清水に吉野の花王(桜)に高尾の紅葉(もも)(丹後のうらまに潮がこんぼる。)

一番 東は関東奥までも老若男女おしなめて参り下向の目出度けり。
(さよ)

二番 南は紀州三熊野の里末々の人までも参り下向の目出度(さよ)けり。
三番 西は住吉天王寺四国筑紫の人までも参り下向の目出度(さよ)けり。
四番 北は越前(能登や加賀)のどやかに越後丹後の人までも参り下向の目出度(さよ)けり。
五番 高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどはにぎわいぞする。
引は ともとても籠らば清水に花の都にみおいて。(を見下して)

五色

おつ 色々の品(に色)こそ(わ)かられ五色には、いざいざ踊り始めんこの踊り、いざや始めん。
しずめ 散りての花は惜(ぞ)しまるる。

あいのうた いざや五色踊らん五色踊らん。(ナシ)

一番 黒きもの黒根黒髪山鳥春の焼野に熊や臥すらん。

二番 青きもの(かりぎに)とくさ借銀糸柳谷の根笹に峰の若松。

三番 黄(き)いものきわだくちなしうきんぞめこがねしょうぞく山吹の花。

四番 赤きもの茜赤土赤いたち朱の盃に海老の盛りもの。

五番 白きもの白根白紙白真雪水晶玉にただけの雪。

引は 何を何を歎くか川柳水の出ばなを歎(する)き候。

さらし

おつ 何も見ず月こそ出ずれ東山、山吹のせに影見えて池さし下(る)すしまお舟、山も川もおぼろおぼろとして是非も分けぬ景色

かな げにやなにしおの都に近き宇治の里、布晒すこそ面白や。

しずめ かちんまいだれ四つ折襦袢掛けて晒さいないただく水もゆりゆりこもれる。(こんぼるる)

あいのうた 晒し晒す宇治の川瀬で布晒す。

一番 夜も明けてしずがたぶさ押し開けて沢辺に出でて布を晒さん。(を)

二番 何時とてもわかては宇治の橋柱見えつ隠れつ乾く間もなし。

三番 橋の小島がさきで立つ波はうちやけいざん布を晒さん。(でも布晒す我也同じく)

四番 (ナシ) あれを見よ宇治の里でも布晒す我也同じく袖をしもらん。(君ゆえ名を晒す)

五番 (ナシ) 宇治の里まきの島でも布晒す我は君故名を晒す。

引は 淀の川瀬の水車誰を待つやらくるくると。

八 幡

おつ (つれ) 松高き枝も連なる鳩の峰、曇らぬ御代は久方の月の桂の男山、実にもさやけき蔭に来て、君万歳と祈るなり。(あゆみ) 歩所を運ぶなり。

しずめ ふしみなれどもねられざるもの。

あいのうた 八幡様には月参り(こうや)後夜の鐘(ナシ)がなるともいざいざ参ろう御八幡。(いざさら)

一番 あれに見えしは八幡山いざいざ参ろう御八幡。(や)

二番 門に立ちたは誰が子息おぼる月夜で見も分けぬ。

三番 なじよしおはるは色黒や笠を着しようやれ日笠をも。(ナシ)

四番 船の上でも女郎は呼ぶ苦をしきねに梶枕。(を)

五番 舟は出て行く後見れば恋の花やら散りかかる。
引は ^(ナシ)とてもとても籠らば清水に花の都を見下して。

天神花踊り

おつ 難波津に咲くやこの花冬(け)こもり今はしるべ(け)に匂いくる。

しずみ (花と見て望まぬ花はなけれども主ある花は折るが大事よ)。

あいのうた いざいざ参ろう天神花を捧げて参ろうよ。^(や)^(お)

一番 梅は飛ぶ桜は枯るる世の中に何とて松はつれな(つらきものかな)からん。

二番 ^(たかり)花盛り花はいろいろ多けれど芳野の花王野田の藤かな。

三番 ^(たかり)花盛り花咲く花も有るけれど吉野の桜に野田の藤かな。

四番 菊の花野菊白菊数多有るいろいろ咲くのは八重菊の花。

五番 桜木のその下蔭は寒からん雲に白けて雪ぞ降りける。^(ど)

引は 黒きの鳥にかわささぎがとまって、一つのかわささぎは何を皮むき落した。急ぎ給え旅人はすとはすを揃えて。

連雀

おつ 色々に色こそ交れ連雀は三条近江下おさか、中将姫のころばたは(小夜の中山月とさす)おのおのうたいで有難(や)しずめ 綾の下地に般若(する)ほじ候。

あいのうた 買うや品物を狭に毛抜きにびんだい鏡を。

一番 国々に諸行無常の首ぞす(ど)(る) 錦の曼荼羅織りて渡さん。

- 二番 わが里にとらの御小姓の玉章を売りてぞ有らば買うぞ君さま。
 三番 江島には十五夜の月出でけり朝日に向う蓮の花かな。
 四番 あれを見よ越後町でももみを売る我も値をしよかざき踊らう。
 五番 日向のや岩戸たとへは月の山池さし下すしまお舟かな。
 引は 日向に霞のかかりたおりは般若ぼし音なけき候。

野 宮

- おつ 千早振るこことも高天の原なれば集り給え四方の神、八百万の神達諸共に天の岩戸に参らんと大神宮は籠らせし、
 神社の神に供えしきせいはいしんごん神楽、ごしんあらばこそこの世を照らせ給うなり、老若男女諸共にあな
 たのお庭に参らんと神に歩みを運ぶなり。

しづめ 此の里はみよく闇路の里なればりゅうの神楽を舞い始め神に歩みを運ぶものなり。

あいのうた 我を神代と頼ずればしんの心は観世音菩薩。

一番 あれに見えしは岩戸山あれに見えしは岩戸山、老若男女諸共にあなたのお庭に参らんと。

二番 大神お宮にじんやごうごんやの神も諸共に野宮踊りを始めんと。

三番 関東駿河有難や小野の小町がうたによりうらべの御子と名付くべし。

四番 野宮踊りにりゅうかぐら舞い納めてはごしんのう天照る神と現われた。

五番 忘るなよこの御恩神に神楽ごしんのを。

引は 天の天の岩戸を後に見て伊勢路高天の原と急がせ給うなり。

熊野三社

おつ 梅を投げ投げ土地しるべとはさりながら早々宮地をふみ分ける。早々宮地をふみ分ける。
しずみ 早飛び出てあと見ればあずちの里に渡りこそする。
あいのうた 熊野踊りを始めんと。

一番 熊野三社の権現を長うまつれよ御神を。

二番 久安元年丑の年十月二十日にそのかたち。

三番 四寸以上の水晶がみたまありける有難や。

四番 とちこうばいしるべとは二丈余りのしきいあり。

五番 天地真の御子にて地藏祭りを給うなり。

引は どどもどどもどらぬくまじわいに九十九羽の小鳥も。

渡 海（大舟踊り）

おつ 二柱みおやの神ぞたまぼこの世の中の道始め給える。

しずめ 追風に往き来の舟のかくしきを風流とこそは言い伝えける。

一番 天が下は数多にかむろぎの海なしませる八十の島々。

二番 今日明日と命つなぐも豊受の神のめぐみと思え世の人。

三番 さびつるやこの世のからのおも国もひるめの神の光り得てこそ。

四番 もろこしの君は変れどたかいかり我が大君の御代はとこしえ。

五番 したがえてやつの朔日着御あり五節に重き祝いひとしや。

引は 弓は袋に劍は鞘に栄えまします大君の御代は幾千代万々歳。

時 雨

おつ 天曇り俄に曇りさそえ来て早々雨になり給え。早々雨になり給え。
しづめ 雲打ちとけてこの里は雨降り真の闇となるもの。

あいのうた 立寄れ若い衆傘召せ若い衆夕立雨の今降るに。

一番 日は照りてのうばの下はこがれ行く山田に落ちよ岳々の水。

二番 鳴神が雲の絶え間に落されてのぞむ所に雨ぞ降りける。

三番 筑波嶺の峰より落つるみなの川雨ぞつもりて洩となるもの。

四番 うずらなく深草山の夕時雨濡れてぞ後は清くなるもの。

五番 雨降りてじよげばんげは目出度がるまた上々も喜びのすえ。

引は 向いの山から時雨がして来て皆女郎達を濡らした。

芭蕉時雨

おつ 谷川の風の掛けたるしがらみは流れもやらぬ紅葉ばり。

しづみ 雨は降るしがらこきどはおせばゆく何とて立ちよかこの御庭に。

あいのうた さらにさらさらはさらさらと濡れてど面白や。

一番 芭蕉葉に時雨の降る音は。

二番 煙草に時雨の降る音は。

三番 板屋に時雨の降る音は。

四番 茅屋に時雨の降る音は。

五番 根笹に霰の降る音は。

引は 雨はぎり降る心は急ぐ若しや出て待つ川越に。

恋 は

おつ よいよいに脱ぎてぞかぬるかりころも、掛けてど頼む同じ世に、住むかいあらばこそ忘れがたにも容赦なしと、捨てては

置かれぬとれば面影にたち勝る、起き臥し我が手枕より後より、恋の責めくればせんかた涙に沖走る。舟ぞおん目出度や。

しずめ 恋は恋恋恋風が来ては袂にかいもつれ袖の重さよ。

一番 我が恋は寺にこそある硯箱中のかげごの筆が知り候。

二番 我が恋はみうちおつぼに溜る水たれかき分けてやる方もなし。

三番 我が恋は細谷川の丸木橋ふみ返されて濡るる袖かな。

四番 我が恋は潮干に見えし沖の石見えつ隠れつ乾く間もなし。

五番 忘るなよ我も忘れじ諸共にたとえいづくの里に住むとも。

引は 恋恋恋が出て庭巻き庭にねするまいやねまいや、じゃこはなしたなじゃこはなしたな、畳にのうとの。

供 養

おつ いざさらば岩に捨子の悲しさは父に添寝の夢を見る。

しずめ 月見の寺にあがりつつすよ。

あいのうた いだや大寺を頼まんと智識を教の道に行く。

一番 東山上る光にひかされて弥陀の浄土に渡りこそする。

二番 寺々の鐘の響を聞く時は諸行無常の響なるもの。

三番 世界をばまんぶのいちと観ずればたみのろうぎも仏なるもの。

四番 九品として浄土の道は数多あるはてしみなどに渡りこそする。

五番 世の中は釈迦を導く世なれども何とて人は辛きものかな。

引は ひとふしならいでしならいであらば、親は喜ぶ世なれども、邪剣な人は釈迦を子に持つ、立つる親を功德にすすめ入るが、そのためにあらやお釈迦は有難や、ついとむらいをして給え、花やしきびや六字妙号を頼むなり。

阿彌陀

おつ 色々に浄土の道は数多ある天も地神も水神も許させ給え南無阿彌陀。

しずめ 弥陀の浄土に渡りこそする。

あいのうた 弥陀もお釈迦も導きに。

一番 ほおぞ比企の昔より難行苦行のその功德。

二番 助け給えやお子孫をしそんに君を奉る。

三番 我がことくのさいねんなむしの罪とがしんめつじ。

四番 もしや此の度おくなば何時をか海路を渡るべし。

五番 いざや急がん教の道弘誓の舟の通う間に。

引は 阿彌陀如来のお慈悲にてにうのあくによつておためすぞ。

註 写本（江戸末期）のある歌詞は写本を主とし、現在伝えている歌詞を傍記した。写本は破損がひどく、また正確でもないようである。